人生が桧原村に向かっていった

―雄大な、ゆるぎない自然に支えられて

松村哲朗（湯久保在住）

◆都心でソムリエとして暮らす

私が檜原村湯久保に引っ越して来たのは、2011年の1月。その前年の10月末で新宿での仕事を辞め、池袋にほど近いオール電化のマンションを引き払って、檜原村へやってきました。

都心での暮らしはとても楽しかったです。

職場は銀座、六本木、新宿と明け方まで賑やかな街ばかり。夜中まで営業するレストランでソムリエとしての仕事を終え、夜中から飲みはじめ、朝のニュースを見ながら布団に入り、昼過ぎまで寝て、また仕事に向かう。そんな毎日です。「これからお出掛けの方も、これからお休みの方も、おはようございます」というテレビアナウンサーのセリフが印象的でした。

好きな仕事をして、美味しいワインを飲む。楽しい日々に疑問の余地ない、自由気ままな暮らし。仕事のスキルを上げ、役職をもらい、給料を上げ、上がった分で良い酒を飲み、広い部屋に住む。それが都心での暮らしの循環でした。その暮らしを変えるきっかけになったのは、想像に難くないと思いますが、結婚です。

◆「これが正しい」という実感

妻の実家、檜原村。

初めて訪れた日はよく晴れ、土のむき出た庭で駆け回る子供達と静かな犬と二匹の猫。いつの間にかバーベキューが始まり、和気あいあいと隔たりもなく進む食事。子供も大人も動物も、湯久保の自然の中、同じ等しい存在でした。

「これが正しい」

それは自分の本質にじんわり染み込むような実感でした。今思えば、カルチャーショックだったと言えるでしょう。

ある物事を捉える時、そこには価値観が存在します。それは大抵が相対的な価値観であったり、自分自身の絶対的な価値観であっても、それは相対的に作り上げて来た価値観であったりすると思います。

複雑に多様化した現代社会の中で、みんなに役割があります。それは立場という言葉でも言えるでしょう。特に都心では、様々な役割、立場を同時に与えられ、そしてそれは短期間で入れ替わって行きます。

その立場で物事を考えているうちに、それは自分自身の本当の価値観と混ざり合い、本当の自分がその役割の自分で、その立場にいないと自分が語れなかったりして、本当の自分をいつのまにか見失ってしまいます。

それが、都心に生活することの虚しさであったり、寂しさを生みます。

ですがそれは日々の刺激の多い暮らしの中で、誤魔化され、慣らされて、気付けなくなっています。

マスコミの情報は流行に左右され、情報は便利と引き換えにその存在価値を貶め、本来知恵と呼ばれるべきものが使い捨てられていく。その中で自分自身を擦り減らして暮していることに、私は気付きもしませんでした。

◆自然な流れの中で

自分でも自覚できないような本質的な部分に語りかける、絶対的な正しさ。それがその場所、檜原村湯久保の空気にはありました。そして続けて思うことは、「ここで家庭をもち、子供を育てられたら、どんなに素晴らしいんだろう」ということ。それは30代半ば

レストラン店内風景

を迎えて、初めてですが自然に思うことでした。

それから檜原村に住もうと思うまでにはそれほど時間がかかりませんでした。

よく言われるのは、「大きな決断が要ったんじゃないですか?」とか、「大変だったでしょう」ということです。しかし、そこにはなんの無理もありませんでした。全てが自然な流れで、スムーズに進んで行きました。それは妻との結婚も含めて。

湯久保で家族と筆者

ですから、私は檜原村に移住したことを、「私の人生が檜原村に向かっていっただけ」と表現します。私の意志はほんのちょっとのきっかけに過ぎなかったように思います。人として本当に必要なものに気づいた時、そこには運命めいて不思議な、けれど無理のない力が働くような気がしています。

◆自然の中で、ただ在る、私

檜原村湯久保での暮らしで感じることは、自然の強さと大きさ、そこに根付く人々の謙虚さと強さ、そして自分の小ささです。

湯久保から見渡す大きな山々の稜線と、高くまっすぐ伸びる杉檜の暗い森。むき出しの岩盤とどこからか滲み出す水。そこに生まれ育つ人々は強大な自然を怖れ、畏れるからこそ敬い、大切に守ってきた知恵で、自然と共に生きています。

そこに対して私ができることなんて、本当にちっぽけで、あるいは皆無に等しく、自分の無力さを痛感します。しかしそれは無力感ですが、虚無感ではないのです。

大きな揺るぎない自然の中で、自分の小ささを自覚すると同時に、自然という絶対的な尺度によって、はっきりと自分の存在を確かめることができるのです。

私がどういう者であっても、自然は揺るがず、私という存在を大きく飲み込んで、存在を許してくれる。自分はただ在る、というフラットな立場。それこそが自分が自分の人生を力強く歩んでいける、揺るぎない地盤なんだと思います。

そこに立って初めて見える、都心型消費生活。それを悪だとは言いませんが、私は知らないうちにストレスを抱えていたことを知りましたし、他人にストレスを与えていたことも分かりました。

◆初めての料理人という仕事

3・11震災以降は特に、人の幸せとは、人の生とは何なのか、自問自答することも多いとおもいます。少なくとも私には、人生の価値は、その意味は、仕事の収入をあげることでもなく、美味しいワインを飲みあさることでもなかったようです。

自分は自分であるのだから、それ以上でもそれ以下でもないのだから。出来合いのものを積み上げた過去には固執せず、日々新しい自分に怖れず。

そんな私は昨年10月に父親となり、同時にレストランを開店し、初めて料理人として仕事を始めました。

全てが初めてのことです。それが同時進行しています。正直大変ですが、私はうろたえず、「自分の人生を力強く歩んでいます」「幸せです」と皆に言えます。

それは檜原村湯久保の雄大な自然の中で、その揺るぎない岩盤を踏みしめているからに他ならないのだと、この文章を書きながら改めて実感しました。

支えてくれている全てに感謝します。そして、この「繋がり」への「感謝」こそが、全ての源なのだと思います。

（まつむら・てつろう＝1976年、世田谷区に生まれる。都内大学を中退後、銀座のワインバーにて飲食業に携わる。六本木ヒルズ、新宿歌舞伎町のイタリア料理店にてソムリエ・サービスとして働く。結婚の翌年、2011年に檜原村湯久保に移住。（結婚式も湯久保の庭で行なう。）同年10月、檜原村払沢の滝入口にて、イタリア料理店「テルピーノ」をオープン。現在はオーナーコックとして働いている。）